
雨と白狐

怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨と白狐

【Nコード】

N7190M

【作者名】

怜

【あらすじ】

酒飲みの魔法使いと友人の出会い

とてつもなく混雑している電車の中で、ぼんやりと立っている。目指す駅もなく、ただこの環状線をぐるぐると回っているだけ。

なにも決めずに動くのはいいい気分だ。制限時間もない、行動目的もない、自由とはそういうことを言うんじゃないか、と思う。

それにしても、この車内を埋め尽くしている人々は皆、なにか目的地があつて移動しているのだろうか。あるいは、僕と同じく、なんの意味もなしに乗っているのだろうか。

おそらくは前者だろう。じゃなきゃ、見ず知らずの人々とともに、こんな狭い空間に押し込められているわけがない。

しかし、僕のような人間は、周囲の人々にちよつとばかり迷惑をかけていることだろうな、と思う。髪の毛は腰まで伸びつぱなしで、暑苦しい黒い外套。それも雨ざらしでぼろぼろになった、泥や酒がこびりついているものだ。を纏っている男。もつとも彼らが、僕を認識することはできないはずだが、無意識に安ウイスキーや、ほこりの臭いを感じる者はいるはずだ。それにこうして数少ない空間を、無意味な移動のために占拠している。若干申し訳ない気持ちにはなるが、まあ数駅の辛抱だ、堪えてくれ。

それにしても、環状線はおもしろい。

円環が好きだ。地球も、そして他の星々も、太陽の周りを回っている。美しい動き。ある種の、魔術的な動作だと僕は感じる。おそらくはそんな気分で、この満員電車に乗っているのは僕一人だろう。いや、もしかすると、他の魔法使いが別の車両にでも乗り合わせていて、円環の神秘に思いを馳せているかもしれない。

大都市には意外なほど多くの、僕の同類がいる。そしてもつと他の存在も。人が増えれば、それだけ隠れるのも容易になる。人々は僕らを見ようとしないうし、こちら姿を見せる気がないから。

ラッシュの時間帯が過ぎると、とたんに車内はガラになった。僕は座席に腰掛け、窓の外を眺める。

今日の空はいい色だ。濃い青。それを背景に、大きな入道雲が浮かんでいる。もしかすると夕立が降るかもしれない……そんなことを考えていると、

「……天気雨ってさ、いいよねえ」

隣で声がした。

「晴れなのに雨。雨なのに晴れ。どっちつかずの空模様。いいよねえ」

長身の女性がいつのまにかそこにいた。真っ白い髪は僕と同じく伸び放題で、目元は見えない。口元は楽しそうに笑っている。

「あんたは魔法使い？ 電車でご出勤かい」と、彼女。

「勤め人に見えるかい」

「いんや。ってえことは、あたしと同じく放浪者か」

「そういうとき。僕はシキという。よく見つけられたね。姿を隠してたつもりだったんだけど」

「そりゃあ」彼女は笑って言う。「あたしの中にはカミサマがいるからね。見えないものはないのよ」

彼女はサヤと名乗った。

僕らは電車を降り、線路沿いの道を歩きながら話した。

幸せって何かという話になると、彼女はいの一番にこう言う。

「飯さ。こいつは、間違いない。飯を食って、寝る。そうしてりゃ大丈夫なわけよ」

「あとは酒だな」僕が言うと、サヤは頷いて、

「酒、いいねえ。シッポが痺れるくらいのがいい」

「君にはシッポなんてないだろう」

「隠してるのよ。もっとこう……親密になんなきゃ、見せるわけないわよ、そりゃ」

「そっいうものかい」

そんなふうにして歩いてみると、空がにわかになんて、灰色になんて、ざあざあ降り始めた。

滝みたいな雨。辺りはあつという間に雨雲に包まれる。

「たまらんねこりゃあ。おっと、あそこへ退散しようや」

僕はガード下へ入って一息ついた。サヤは懐中の刻み煙草が湿ってないかを気にしている。

「天気雨じゃなく、完全に雨に傾いちゃったねえ。まあ涼しくていいかね」

ごろごろと雷鳴がとどろいた。彼女は、くわばら、くわばらと口の中で唱える。

「待っている間、これでもどうだい」と、僕は酒瓶を取り出して見せる。彼女は笑顔になって、

「いいねえ。雨ん中飲むのも粋なもんだ。やろっじゃないか」

僕らがちびりちびりと飲んでいると、ひと気のない通りに妙なものが見えた。

そいつは紛れもなく、魚だった。雨の中をすいすいと泳ぐ巨大な魚。

よく見るとその姿は透き通っている。雨水のしぶきが形を取って、泳いでいるかのような

「あんなの初めて見たよ」

「ここいらにや、よく出るよ。雨の精霊だね。雨雲と一緒に生まれて、夕立と一緒に降りてくる……食ったらうまいかな。いんや、味なんてしないか。雨でできた猫がいりや、食うだらうけどさ。魚か……秋刀魚でも食いながら、酒をやりたいな。飯は大事だよ、酒飲むときにや」

雨の魚は辺りを一泳ぎして、空の彼方に消えていった。

もうじき止むだろう、とサヤが言う。間もなく彼女の言うとおり、空に光が差して来た。

「見なよ。いいものが見れるよ」

ガード下から出て西の空を見ると、虹が出ていた。

「今日は、いい日だな。酒ありがとよ、シキ」と彼女。

「礼を言うのは僕のほうさ。あのまま電車で眠っていたら、虹を見過ごすところだったよ」

「いいつてことさ、虹ってのは、空があたしたちに見せるものだからね」

それから雨上がりの町を少し歩きながら話して、サヤと別れた。

「じゃ、今度飯と一緒に食おうじゃない。また会おう」彼女は白い髪を揺らしながら、歩いていった。一瞬彼女の姿が、白い狐に見えて、そして消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7190m/>

雨と白狐

2010年10月8日13時26分発行